

僕と猫とダンボールと 〔第一話〕

猫はダンボール箱が大好き。ダンボール箱屋さんをやっているのと、そんな声をよく聞く。確かに、『彼女』はダンボール箱が大好きだった。でも、彼女はまるで、ダンボール箱にも愛されているかのようだった。

彼女が亡くなってからもうすぐ十七年になる今でも、年に一度、彼女を特別な感覚で思い出す日がある。それは彼女が亡くなった日。六月三日、梅雨の朝。

命日に故人を（故猫）思い出すのは普通の事だけど、彼女の場合は少し、それとは別の感じで思い出す。



彼女との出会ったのは、二十年前の秋の夜だった。夜九時ころ、友人宅からの帰り道、僕は車で田舎道を走っていた。

例えば、前を走る車が不意に何かを避けた時は、大きなゴミが落ちてくるか、猫がひかれているかだ。前の車が何かを避けた。暗くてよくは見えなかったけど、それが猫だとすぐにわかった。

『猫、、か。でもなんか、きれいだな・・・寝てるのか？』
なぜかそんな感じがした。

僕は前の車と同じラインで避けようとした。でもやっぱり気になってチラッと見てしまった。猫には目立った外傷もなく、本当に寝ているかのように横たわっていたが、姿勢はちよつと不自然だった。

『やっぱり死んでるよな・・・』
そう思っつてその場を通り過ぎ、五十メートルくらい走った。

やっぱり、やっぱり何か気になる。

そう思い、なんとなくバックミラーからその猫を見た。その時だった。
ムクツ！ と、上半身を起こしたのが見えた。見えて、しまった。

『うわあああああ！ 見ちゃったよ！』

一人運転なのに、本当にそう叫んでしまった。

生きてる、、、生きてる、、、生きてる、、、

更に五十メートルくらい走って、僕は車を止めた。そして猫のもとに戻った。自分がこれからどういう行動をとるか、自分でも予想できなかった。とにかく戻らずにいらなかったのだ。

やっぱり猫は生きていた。足に怪我をしているらしく、動けないでいた。たぶん、車にひかれてしまったのだろうけど、足の怪我だけで動けなかったらしい。

でもどうしよう・・・？ とにかく、持って行かなきゃ。

車には、友人宅でもらった野菜の入ったダンボール箱があったので、それを使うことにした。あれこれと準備をしていると、通り過ぎる車のドライバーが、『どうしたの？』と声をかけてくれた。事情を話すと、『これを使いなよ』と、タオルを何枚かくれた。それを箱の底にひいて、猫をそおっと、箱に移し、助手席に乗せて箱を固定した。

僕は車のエンジンをかけ、大きくため息をついた。

出発前に、もう一度ダンボール箱の蓋を開けて、猫を確認した。上から覗き込む僕に、猫は恐る恐る顔をあげて僕を見て『にやああ、』と、か細い声で小さくひと鳴きした。

これが、僕と彼女（猫）、そしてこのダンボール箱との出会いだった。

つづく

